
平成日中戦争 ～日本の未来～

カトタク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平成日中戦争 ～日本のみらい～

【Nコード】

N4563Q

【作者名】

カトタク

【あらすじ】

2010年9月7日に起こった尖閣諸島衝突事件……。その後も中国の日本に対する圧力は拡大し続けていた。そんな中、ようやく政権を回復した自民党は、“諸外国に強腰な国家”を目標とした新内閣を立ち上げ、赤城修斗を内閣総理大臣とする新内閣は対中国、対北朝鮮を念頭に置いた大軍拡を開始した。そして3年後の2014年。

超効率化竣工・艦装を終えた海上自衛隊、大幅な人員拡大・装備の大量生産化を行った陸上自衛隊、国産戦闘機を主力とした航空自衛

隊はそれぞれ海上国防軍、陸上国防軍、航空国防軍に改編され、ついに日本に対し宣戦布告をした中国に戦いを挑む。

心神その他新型兵器多数登場

序章 2010年9月7日 其巻（前書き）

どうも、はじめまして・・・じゃない人もいるでしょうが、カトタクです。

にじファン上の作品の外伝とありますが、別に読んでいないからといって困ることはありません。

更新は遅いですが、よろしく願います。
ではどうぞー！！

序章 2010年9月7日 其巻

2010年9月7日AM10:00 尖閣諸島沖

この日、第11管区海上保安部所属の巡視船 みずき は久場島付近の海域をパトロールしていた。

「良い風ですね。船長。」

この船の副長である小野間修司三等海上保安正は隣に立つ男・・・この船の船長である浜嶋海治三等海上保安監に話しかける。

「こんな日に限って、密漁船やらなんやらが出てくるんだがな。」

「前回もそうでしたからね・・・。」

前回というのは尖閣諸島で密漁をしていた小型ボートの事だ。その時は数回の警告だけでその場を退散したのだが。

「南南東の方角、尖閣諸島近くに船影あり！！」

見張り員が報告する。

「またか。該船までの距離は？」

「約5キロです。」

「すぐ近くじゃないか！！ 該船に向けて警告無線準備！！ ただちに対処を開始する！！」

「了解！！」

「全乗組員に通達。本船は、尖閣諸島付近の不審船対処に向かう。心してかれ。以上。」

「進路、南南東。距離、4.7キロ。全速前進！！」

搭載された3基のディーゼルエンジンが船体を12ノットから35ノットにまで押し上げる。

『此方第11管区海上保安部所属、みずき。パトロール中にて不審船を発見。これより接触を行うが万が一のため応援を求める。』

『了解。よなくにとはてるまが今そちらに向かっている。到着するまではそちらで対処せよ。』

『了解。』

「該船識別圏まであと2分です!!」

「警告無線発信開始!!」

『警告する。貴船は日本国の領海を侵犯している。ただちに作業を中止し、現海域から離脱せよ。繰り返す——。』

中国語、韓国語で呼びかけるが密漁を続けている。

ようやく到着した よなくにと はてるま も警告を続けているが、 はてるま は少し離れてこの様子を撮影している。

「JM61 20ミリ多銃身機関砲用意!!」

「撃つんですか!？」

「いや。動かすだけだ。」

「機関砲用意!」

みずき が船首にある唯一の武装、JM61 20ミリ多銃身機関砲を動かそうとしたその時、漁船の様子に動きがあった。

漁船は速力を上げ、巡視船から離れるような動きをしたのだ。

「機関砲用意中止!! 見張り員は漁船から目を離すな!!」
言われなくても見張り員は漁船の様子を注視している。

漁船は一旦左に舵を切り巡視船から離れると、一気に右に舵を切った。

右? そう。巡視船の真横に向かってである。

「該船突っ込んできます!!」

「取り舵一杯!! 船を傷つけられてたまるか!!」

みずき が左に舵を切ると、漁船もそれに食いついてくる。大きさは小型船とはいえ みずき のが大きいいため、漁船より若干旋回が大回りになる。

そして——

グワシャ——ン!!

「該船衝突!! 午前10時15分!! 右舷船腹に該船衝突!!」

「けが人はいないか!!」

「けが人なし!! 機関以下設備も損傷軽微です!! 漁船が離れ

て—— よなくに に突っ込みます!!」

衝突した みずき から離れた漁船はあろうことかそばにいた よなくに にまで衝突したのだ。

「このまま横暴を見逃すわけにはいかない!! 機関砲用意!!」

「撃ちますか?」

副長もさっきの“!?”ではなく素直に“?”で返すところまで怒りが沸いているようだ。

「俺が許可したらな。」

「本部の許可は取らなくていいんですか?」

「現場の判断、正当防衛、緊急避難だ……。」

「いささか説得性に欠けるとは思いますが。まあいいでしょう。」

「機関砲用意!! 但し許可があるまで発砲はするな!!」

今度こそ機関砲が動くと思いきや、

「該船、停止します!!」

見張り員からの報告が入る。まあ報告が入らなくても漁船が減速しているのは船内からでも見えたのだが……。

「該船を確保する! よなくに とで挟み込む!! いつでも発砲出来るようにしておけ!!」

みずき と よなくに が漁船に近づき、両側から挟みこむ。

3隻が固定されると、漁船の中から男たちが出てくる。乗っていたのは8人ほどだった。

その間も みずき と よなくに の機関砲は漁船に向けられている。

先ほどから言っているJM61 20ミリ多銃身機関砲は、最大で毎分7200発を発射することが出来るバルカン砲であり、本来対空兵装であるのだが、海上保安庁では毎分600発程度に抑えられたものに改造され、対船艇火器として使用しているものである。

20ミリという口径のため船を撃沈するまでには至らないが、行動不能に陥れることは十分に可能である。ちなみに よなくに には

これとは別の30ミリ機関砲が搭載されている。

さて、漁船から出てきた男たちがの中から船長格らしき男が進み出ると、中国語で何か話し始めた。修司が通訳してみると、彼らは「尖閣諸島は我々中国の領土である。したがって我々は日本の指示に従う義理はない。」

ということを言っているらしかった。

日本としてはそんなことを「はいそうですか」と認めるわけにはいかず……。

「あなた方は条約によつて認められている日本の領域に侵入し、密漁を行った。そして我々海上保安庁の巡視船に明確な攻撃を与えた。よつてあなた方を領海侵犯、及び公務執行妨害の現行犯として逮捕する。言い分は日本本土で言うように。なお、あなた方の船は日本まで曳航させていただく。」

浜嶋船長は、それだけを告げると有無を言わず背をむけ、漁船の燃料を抜くように命じる。

そして みずき と よなくに、そして はてるま は中国漁船の拿捕を終わらせると石垣島へと船首を向ける。

こうして中国との関係の軋みが生まれたのである。

そして中国との戦争への第1歩となったのである。

序章 2010年9月7日 其巻（後書き）

第1話なので、少し短めです。

次回は、政治的な話・・・になるのかな？分からないですが。

ご意見、ご感想お待ちしております。

ではまた！！

序章 2010年9月7日 其弐（前書き）

やっと書き終わりました。

今回は主に中国・・・政治家がらみの文章は書きづらかったのあまりうまくはありません。

っていうか国家主席おかしいです。

覚悟をもってどうぞ。

序章 2010年9月7日 其貳

2010年9月7日 PM11:00 首相官邸

「どういうことだ!？」

此処は日本の東京都千代田区永田町。つまり首相官邸。

「ですから、中国側から海上保安庁が逮捕した漁船の乗組員を解放しろとの抗議があつたんです。」

「そうでは無い。なぜ法に則つた対処をしてるのに中国に抗議されなきゃなんのだ。」

「それは中国が尖閣諸島を自分の領土だと思つているからですよ。」

「やはり……。わかつちやいたが此処で抗議されてもな。」

「どうします? 日本側の正式な回答で“嫌だ”って返しときますか?」

最近の内閣ではこのような事が起こつた時、無視を通してうやむやにしてしまっているが、この時の内閣総理大臣、菅直健人もその中の一人だった。

「全く。海保も余計なことをしたな……。対応するこっちの身にもなつてくれよ……。」

それを聞いて秘書官は驚きを通り越してあきれ果てていた。

密漁者の逮捕が余計な事だつて? 巡視船に体当たりまでした奴らだぞ?

「そういうことをするのも総理の仕事です。早急に返事を返さないと政府の無策を疑われますよ。すでにこの件はマスコミに漏れていますし。」

「……一応こっちからは“此方の領内でおきた事件のため、此方の裁量で裁かせていただく”と返しておいてもらいたい。」

「分かりました。」

それだけ言つと、秘書官は外務大臣に連絡を取るため、官邸を後にした。

同日 PM11:00 中国国家主席執務室

「此方の文書の内容をそのまま日本に伝えましたがよろしかったでしょうか？」

執務室に入ってきた秘書官が話しかけた相手はこの国のトップである胡錦沌国家主席である。

「ああ、ありがとう。全く日本の沿岸警備隊にも困ったものだ。もともと日本には我々中国に対し領有を主張する権利などないというのに……。」

「なぜですか？」

「そりゃ君、日本は中国の属国に過ぎないからだろう？ あんな小さな国が我々中国人民に楯突くなんて許せないとは思わないかい？」それを聞いている秘書官、その実は親日派である。なので主席の言葉聞いていてあまりいい気はしない。

「国民の中には主席と同じ意見を持つ人もたくさんいるでしょうが、そう思わない人も少なからずいると思いますよ。」

極端な反日思想を持つ主席とは絶対に釣り合わないような人たちがね……。

そう言いたい口を強引に抑え込み、秘書官は主席を柔軟にたしなめた。

「そんな国民は中国には必要ないな。戦争時には一番に前線に送ってやるか。」

もちろん冗談なのだろうが、こんな人間が国家主席の座に治まっていてだいじょうぶなのだろうか。……冗談なんだよな？

「主席、冗談ですよね？」

秘書官の頭に冷や汗が浮き出る……。
「もちろんそうだが、もしかしたら……かもしれんな。」

やばい。自分はこの国から逃げ出さなければならぬかもしれない。秘書官は自分が落とされてしまった不安の渦から逃れようとしたと

き仲間から日本からの返事が届いたとの連絡が入った。

内容は・・・“此方の領内でおきた事件のため、此方の裁量で裁かせていただく”・・・だった。

実に簡潔でありながら主席の機嫌を数段階落とすのには十分だったようだ。

「中央軍事委員会を招集しろ。日本に対する抜本的軍事制裁について話し合いたい。」

「は、はい。」

秘書官は涙目である。

「早くしろ。」

秘書官はそう言われて執務室から走り出た。

「・・・主席が中央軍事委員会の招集を命令した。ただちに招集を。」

「・・・了解。・・・日本ですか？」

「ああ。」

仲間の秘書官も苦い顔を見ると、招集対象者に連絡を取るため、事務室に行ってしまった。一人残った秘書官、琥詔征も諸手続きを済ませるため、その場を後にした。

そして3時間後・・・

「それでは日本に対し武力侵攻を行うというのですか!？」

「そんなわけないじゃないか。私が言っているのは尖閣諸島に日本を抑圧するために上陸訓練を行いたいということだ。」

「それではあまりにも・・・それにそんな事したら日本だったのだじゃおかないのではないですか？」

至極もつともな意見ではあったがこれは日本にも非があった。

「いや、そうはならないかもしれないぞ。先月北方領土にロシアのメドベンジェラー大統領が視察した時に同行した80人の兵士に対して全く抗議しなかったじゃないか。それどころかまるで歓迎するようなセリフを言っていたぞ? あの国の総理は。」

そうなのである。8月にロシアの大統領が北方領土を視察に来た際、菅直首相は相手をなるべく刺激しないという方針で、“北方領土は日本の領土”という意見を最大限押さえつけて、完全武装のロシア陸・海軍含む87人の軍関係者とロシア大統領を歓迎してしまい、それに付け込んだロシアはその後国防相や天然資源・環境省長官に北方領土を視察させ、ますますロシア領としての認識を進めようとしているのだ。

それを聞いた胡錦滄主席は我々も強行策を取ってみないかと委員会を招集したのである。

「しかし現有の装備ではもし、万が一日本の海上自衛隊が攻撃してきた場合、負けることはないまでも勝つことは難しいと思われます。」

「・・・我が国最初の航空母艦が就役するのはいつだったかな？」

「約2年後ですが・・・まさか！！」

「そう。2年後に日本に攻撃を開始することを前提にこの会議に参加してほしい。」

「・・・・・・・・・・」

中国の空母開発は1998年に旧ソ連の航空母艦「ヴァリヤーク」を購入したことに始まり、その構造を徹底的に調べたのち、2009年から大連造船所の地下、第112中国軍事秘密施設、要するに地下ドックで建造がはじまり、現在30%まで完成している。

なんとこの建造費用の中には地震が起きた際の日本からの支援金までもが含まれているのだ。恩を仇で返すとはこういうことなのだろうか・・・。

「どうした？」

「いえ、分かりました。ですが具体的な内容に関しては明日以降日を改めてはいかがでしょうか？」

驚きつかれた委員たちはとにかく休息を欲していた。

軍事委員とて戦争が好きなのではないのだ。

「そうだな。では3日後の定例会議の後によりしく頼む。」

「「分かりました。」」

すると席を立とうとする委員を主席が引きとめた。

「君たち。ここで今行った会議は日本に拘束された漁船の乗組員の対策を練るための会議だ。いいね？」

委員たちはその言葉に含まれた意味を悟り顔をひきつらせた。

ぶっちゃけ“ 此処で話した事をしゃべったら銃殺刑だから、気を付けてちょうだい”と言われたのと同じだったからである。

委員はその状態のまま会議室を後にした。

残された胡錦沌国家主席はノートパソコンの画面に精巧にデザインされた航空母艦 琥炎 と今年試験配備が始まったばかりの戦闘機

殲 - 20 の画像をいつまでも見つめていた。

序章 2010年9月7日 其貳（後書き）

どうでしたか？

今回は主に日本側を書きたいと思います。

ではまた次回。

ご意見、ご感想お待ちしております。

序章 2010年9月8日～2010年12月31日（前書き）

次回はおもに日本とか言っときながら、結局現政権の状態を書くのが正直めんど．．いや難しかったので年表形式にして次回から本編に入りたいと思います。

短いですがどうぞ。

序章 2010年9月8日～2010年12月31日

2010年9月8日 AM05:00 首相官邸前

首相官邸前では、密漁をしていた中国漁船の乗組員を海上保安庁が逮捕したという情報を聞きつけたテレビ局のスタッフたちが首相の出勤を今か今かと待っていた。

だがその時首相は家の前に待ち構えていた非常識なテレビクルーによつて質問攻めにあい、車に乗りこむのに苛々としているところだった。

「首相！！ 今回の事件に関して何か一言いただけますか！？ 中国大使館側の反応はどの様なものでしたか！？ 今後の中国人乗組員に対する処置は！？」

家の前にいたクルーは数名だったが前々からしつこい政府批判型の迷惑テレビ局だった。

「まだ調査中だ。正式に海上保安庁の本部からの回答を待っている以上だ。早くどいてくれ。官邸に行けない。」

ガードマンの防御効果もあつてか、クルーの波が一瞬消えたとき、菅直首相はすぐに車に乗り込んで、車を出させた。

その時取られた映像が、朝のニュースで流された事はいうまでもない。

そして官邸前でも首相がもみくちゃにされたこともいうまでもないだろう。

それから1年後、無駄なパフォーマンスに力を入れすぎた民主党は衆議院議員総選挙で議席を4分の1も獲得できず、敗北。ようやく自民党が政権を回復した。新内閣総理大臣となった赤城修斗（52歳）は、ついに中国に抜かれたGDPの再回復、800兆円にも及

ぶ国債の返済、そして経済氷河期の終焉に向けて、国内の大改造を開始した。

本編を始める前にこの間の事を説明しておこう。

2010年 9月25日

逮捕した中国人船長を釈放。

2010年 9月27日

日本への対抗措置としてレアアースの輸出を制限。

日本はベトナムなど、新たな輸入先を探し始める。

2010年 10月

国民の間から、中国に対する低姿勢を批判する声が殺到。

また中国では反日デモなどが過熱し、日本車や日本企業への破壊行為が相次ぐ。日本政府は海外支社の社員に外出自粛などを呼び掛けたが、中国に抗議などは一切行わず、中国国内ではデモがさらに過熱した。

中国当局はデモの自粛を呼び掛けてはいたが、警察隊員のそばでなら、大規模なデモ、破壊行為を見逃すなど、日本への仕返しとともとれる行為を行った。

また軍事機密地区に無断で立ち入ったとして、日本人企業社員3名を拘束し、1ヶ月間にわたり軟禁させた。

2010年 11月

政府の批判がさらに強まり、菅直首相による改造内閣の発表なども行われたが、首相が変わらないため基本的な方針が変わらず、国民の不満解消につながらず、ついに総選挙に踏み込むことになった。当初民主党は議席は少なくなるだろうが過半数は取れると踏んでいたが、結果、全480議席中100議席という民主党史上初めてのの

議席過少となり、自民党に

200議席以上の差をつけられ大敗。事実上の再政権交代となった。新内閣総理大臣の赤城修斗は国内の大改造に踏み切ると明言し、来年度予算の見直しに入り始めた。

2010年 12月

来年度から10年間に及ぶ期間のなかで適用される新防衛大綱が発表され、衆参両議院で可決。

- ・海上自衛隊の潜水艦部隊を16隻体制から30隻体制に移行。
- ・海上自衛隊のBMDシステム搭載艦を4隻体制から6隻体制に。
- ・航空自衛隊のF-Xを国産戦闘機に方針切り替え。完成までの間はF-15Jの改修、F-2の緊急生産で乗り越える事を決定。
- ・陸上自衛隊を3師団増設することを決定。（今後5年間）
- ・陸海空自衛隊の定員を今後10年間でこれまでの1.5→2.3倍にすることを決定。

などの内容で決定した。

他来年度予算が決定し、これも衆参両議院で可決した。

序章 2010年9月8日～2010年12月31日（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

本編 2011年1月1日（前書き）

なんか執筆速くなってます・・・。

なんか総理が変な人です。性格が安定しません。

では本編どうぞ。

本編 2011年1月1日

2011年 1月1日 Side 赤城修斗（内閣総理大臣）

「首相!!」

後ろから呼んでいる声に気付いて足を止める。

「金森。どうしたんだ？ それと首相はよしてくれよ。」

金森慎司は私の昔からの友人である。今は国会の秘書官部に勤務していて、私の秘書ともなっている。

「ああ悪い赤城。それはそうと外務省から連絡がありました。」

「何があつたんだ？」

前回の中国といいまた嫌なことがあつたんじゃないかと一瞬顔が張る。前任の菅直さんのおかげで中国との関係以上に国民の反感が強い。早急に何かしないとならないのだが。

「ベトナムから、レアアースの算出に大体の目処立ったと住神商事の現地支社が報告してきたようです。」

「そうか。・・・だが生産と輸入開始はいつごろになりそうなんだ？」

「早ければ今年の夏までには生産が開始され、秋には輸出が出来るようになるようです。」

「おお、それは良かった。それなら安心して政策を広げられる。・・・ところで、防衛省の方はどう言っている？」

防衛省には予算内に組み込んだ予算の他に、特別政府資金として預けられているものからも出資することが決まっている。その内容は私と一部の官僚しか知らないが・・・。

「はい。それが発注する数が多いのと工期が短いのでドックの数が必要なくなっているそうです。民間の船舶事業は後回しにすることも出来るようですがどうするかとの事です。特に中国企業の・・・と言っていました。」

「では“出来るだけ早く”竣工させるようにと伝えといてくれ。2

年以内にどうにかしないとイケない。」

中国が何か日本との武力交戦を始めようとしているとの情報は陸上自衛隊の特殊作戦群（S F G p）内部にある諜報組織からもたらされたものだ。

スパイが存在していないといわれているこの国にもれっきとした諜報機関は存在しているのである。アメリカのC I A、ロシアのF S B、中国の中央統一戦線工作部、など各国の諜報機関の支部が集中する都心には、各支部に最低30台ものカメラや集音機が取り付けられ、各国の情報収集を収集しているのだ。ちなみに北朝鮮の武力部情報総局も住所、構成員全て調べ上げられ、各構成員には埋め込み式のG P Sが取り付けられ、いどこにいたかが瞬時に分かるようにされている。さらに北朝鮮本国にも特殊作戦群の15名が武器弾薬ともに送り込まれており、政府の命令次第ですぐに行動に移せるようになってる。

「分かりました。では私はこれで失礼します。」

「ありがとう。」

私はそれだけを金森に言うと、彼を見送った。

・・・自衛隊の増強。出来たら軍への格上げ。

自分は右翼では絶対にならないが、任期の内にそれを実行しないと大変なことになる。

現在の日本の総兵力27万人（予備役込）。対する中国224万人（正規兵）・・・。

この差では質だけじゃカバーできない。

この国は中国への人員依存を少しずつ減らしていく必要がある。

日本人の職が外国人に奪われているのだ。

・・・国家主導で農作物生産でもやってみるか？

その3日後。その政策、もとい思いつきは食用植物工場生産化計画として衆参両議院民主党以外全員賛成で可決した。

近年稀にみる即効決定だった。

計画としては全国の20階建以上の中古ビルを国費で購入し、内部を改装したのち大学教授などの研究を基に土を使わず液体肥料のみで野菜などを栽培するというものだ。

前々からこう言った栽培の仕方は研究されており、各大学の農業科学科などでは実験的な栽培を始めているところもある。政府の中でも何度か議題に上ってはいた計画なのだ。なので今回この計画が一気に加速したのも中国からの食糧輸入にストップをかけようとする意志が働いているのかもしれない。……実際に私には提案したのだが。

スタッフには全国就職難の方々を中心に募集をして言動や態度、国籍などを厳重に審査したのち選ばれた約18万人の人々を仕事に着かせる。現在は第1弾として九州では佐賀・福岡・鹿児島に全40棟、四国では高知・香川に全33棟、本州には東京・神奈川・千葉・静岡・愛知・石川・新潟・島根に全302棟、北海道には全20棟購入し、栽培を始めた。大体1棟当たり450人である。

その後2年間で計画は第2、第3弾と続けられ、農業工業生産業（第4次産業）は順調に実績を伸ばしていった。

第1次産業従事者は早くも第4次産業に乗換え始め、ますます生産は伸びていった。

そしてほとんどの農作物を自給率100%に押し上げ、輸入に頼る必要もなくなり、転じて輸出を始めるまでになった。

閑話休題

こうした流れが出来てくると、次は国債の返済に頭を回さなければならぬ。

……正直中国に賠償金として支払わせたいんですけど、コレ。だが戦争もしていないのでそういうわけにもいかず、（そういえば尖閣諸島でぶつけられた時の修理代まだ払ってもらってないな）

国会議員の給料や資産が多くてウハウハしている家からも特別税として納めてもらうことにする。おもに鳩山とか鳩山とか・・・私の給料もこの前見たときはあり得ない数のドットがあったのでわざわざ財務省に掛け合って30万程度に下げてもらった。国庫に残りは放り込んだ。

あとは・・・第4次産業の儲けの4分の3を国債返済に充てるか。残りは年金用に・・・。たばこ税・・・100%にしてみるか？んで五分五分で国庫と国債に。

防衛費はわけわかんない部署の予算をまとめておく倉庫として使うことにする。何にせよ次から次へと入ってくるだろうからな・・・。消費税は・・・7%に上げよう。2%増税なら何とか納得してくれるだろう。増税2%はすべて国債返済に充てるからデフレは起きないはずだ。後で国会に提出しておかないと。

ん？これを全部可決させたらどんな増収入になるのだろうか。

んあ？収入になっても防衛費に回して間に合うのか？

あれ？こういうことって閣僚と話し合わないといけないんだっけ・

・・・？

・・・つく。頭が痛くなる。

昔からの癖で、なんでも一人で決めてしまいそうになるちょっとアブナイかもしれない総理がここにいた。

本編 2011年1月1日（後書き）

早く艦隊とか出したいのですが・・・。
もうちょつとかかるかな・・・。

ではまた次回。

ご意見ご感想お待ちしております。

本編 2011年1月3日〜2012年10月7日（前書き）

今回はあまり小説っぽくありません。

それでも良ければどうぞ。

本編 2011年1月3日〜2012年10月7日

2011年 1月4日 Side海上自衛隊第1艦隊

「対艦ミサイル4基接近！！ 方角270、距離95km！！」

「ECM照射始め！！ ESSM発射用意！！」

「対艦ミサイル、1基海面に墜落！！ 3基以前接近中！！」

「ESSM攻撃始め！！ 主砲撃ち方用意！！」

「ESSM緒元入力完了。1、2、3番発射用意・・・ッテエ
！！」

「航空機等の接近は！？」

「ありませんッ！！」

「インターセプト5秒前・・・スタンバイ・・・マークインターセ
プトオ！！」

「2基撃墜！！ 残り1基です！！」

「主砲撃ち方始めエ！！ CIWSオートロック解除！！ 絶対に
撃ち落とせ！！」

「撃ち方始めエ！！」

「距離5km！！ 接触まで20秒です！！」

「チャフ、CIWS発射始めエ！！」

「総員衝撃に備えエ！！」

「接触まで5,4,3・・・撃墜！！ 本艦より500mで撃墜！
！ 全基撃墜です！！」

「被害の報告を！！」

「船体に破片が直撃。されど航行・戦闘に支障はありません。」

「分かった。浮かれるんじゃないぞ！！ 対空・対水上・対潜警戒
を厳となせ！！」

「了解！！」

―― 1時間後

「今日の訓練も疲れましたね、砲雷長。」

「航海長……。まさか500mまで接近を許してしまうなんてな……。」

此処は海上自衛隊第1艦隊の「こんごう」の科員食堂である。

そこにいる二人の男、航海長の尾崎稔3等海佐と砲雷長の椎名三圀3等海佐は疲れた様子で椅子にもたれ掛かっていた。

「この間の大規模艦隊編成変更はどういう意味だったんですかねえ。」

「護衛隊群もただの艦隊に変わっちゃってな。まあその方がこつちとしてはうれしいんだが。」

さかのぼること2日前、赤城首相から防衛省を通じて発表された艦隊配置の転換要請で海上自衛隊の第1〜4護衛艦隊群は全て解体し、新しく第1〜6艦隊を編成。さらにそれ以外の艦（旧式艦）は新たに設置された第1〜6護衛艦隊に編入させ、艦隊隷下に指揮系統が置かれた。従来の護衛隊は全廃止され、直接の艦隊行動とし、司令部も各艦隊に一つずつ割り当てられた。その編成を見てみるとこうなる。

第1艦隊（司令部・横須賀）

ミサイル搭載型護衛艦「こんごう」

ヘリコプター搭載型護衛艦「ひゅうが」

汎用護衛艦「むらさめ」「はるさめ」「たかなみ」

第2艦隊（司令部・佐世保）

ミサイル搭載型護衛艦「きりしま」

ヘリコプター搭載型護衛艦「いせ」

汎用護衛艦「ゆうだち」「きりさめ」「おおなみ」

第3艦隊（司令部・舞鶴）

ミサイル搭載型護衛艦「みょうこう」

ヘリコプター搭載型護衛艦「たかお」
汎用護衛艦「いなづま」「さみだれ」「まきなみ」

第4艦隊（司令部・呉）

ミサイル搭載型護衛艦「ちようかい」
ヘリコプター搭載型護衛艦「はりま」
汎用護衛艦「いかづち」「あけぼの」「さざなみ」

第5艦隊（司令部・函館）

ミサイル搭載型護衛艦「あたご」
ヘリコプター搭載型護衛艦「のりくら」
汎用護衛艦「ありあけ」「あきづき」「てるづき」

第6艦隊（司令部・那覇）

ミサイル搭載型護衛艦「あしがら」
ヘリコプター搭載型護衛艦「あかいし」
汎用護衛艦「すずなみ」「もちづき」「みかづき」

汎用護衛艦はむらさめ型以降のものだけを使い、全体の平均艦齢が若い。各艦隊における護衛艦の数が少ないと批判が出たが、今後5年以内に大量の艦艇を配備させることを発表し、そのため陸海空自衛隊の定員を最大3倍に引き上げる方針を示したのだ。

「もう本部じゃ1万人以上の入隊希望者を受け付けてるらしいぜ。」
「それって・・・。」

「ああ。海自だけでだ。」

近年稀に見る自衛隊増強政策である。

2011年現在の海上自衛隊員数は約4万6000人である。この中で実際に艦に乗艦して行動しているのは約3万1千人である。新しく入ってくる隊員がほとんど艦隊勤務となるなら相当数の護衛艦が必要になるがどうなるのだろうか。

「なあ、椎名。こんな噂を知ってるか？」

「どんなだよ。」

防衛省で勤務している友人からの話であり、結構有力である。

「裏海上自衛官と裏航空自衛官の団体16000人余りがアメリカの海軍学校に研修に行ってるらしいぜ。それも約6年前から。」

「政権交代前か。・・・空母か？」

「さあな。だがこれまで日本が持っていなかった物を持つことになるのは確かだな。」

これは民主党に一切知られることなく進められていた日本の空母取得の準備だったのだが、その事を二人が知るわけがない。知っているのはその16000人の自衛官たちと一部の閣僚のみなのだから。もちろんすでに空母の建造がはじまっていることも二人は知らない。

2012年 10月1日

防衛省が行った今年行われる観艦式についての取材で、海上自衛隊の全艦艇の艦名を漢字表記に変更することを発表。さらに明日から1週間の我々の発表を心してお聞き下さいと発表。

2012年 10月2日

三菱造船のドック内で、公開建造中だったイージス護衛艦4隻が進水。「敷島」「朝日」「初瀬」「三笠」と命名。

2012年 10月3日

三菱造船のドック内で、極秘建造中だった原子力空母4隻を公開、および進水式を行う。「赤城」「天城」「水城」「山城」と命名。

2012年 10月4日

三菱造船のドック内で、極秘建造中だったイージス戦艦4隻を公開、および進水式を行う。「大和」「武蔵」「信濃」「紀伊」と命名。

2012年 10月5日

播磨造船のドック内で、民間の貨物船として造られてきた、戦闘輸送艦3隻が進水。「伊豆」「能登」「房総」と命名

2012年 10月6日

播磨造船のドック内で、通常の補給艦として造られてきた戦闘補給艦3隻が進水。「琵琶」「猪苗代」「丹沢」と命名。

2012年 10月7日

三菱造船、播磨造船、三井造船のドック内で、ミサイル防空母艦1隻が同時進水。「風神」「雷神」「龍神」「水神」「火神」「氷神」「土神」「陽神」「天王神」「海王神」「冥王神」と命名
また、防衛省はこれらの艦艇はすでに偽装を整えたものであり、今すぐにでも、配備が可能であると発表。そのため、各基地に人が殺到。

中国から抗議の文面がといたことも発表。
新しい艦隊編成は次の通り

第1艦隊（司令部・横須賀）

ミサイル戦艦「大和」

ミサイル搭載型護衛艦「金剛」

ヘリコプター搭載型護衛艦「日向」

航空機搭載型護衛艦「赤城」

汎用護衛艦「村雨」「春雨」「高波」

ミサイル防空母艦「風神」「雷神」

第2艦隊（司令部・佐世保）

ミサイル戦艦「武蔵」

ミサイル搭載型護衛艦「霧島」

ヘリコプター搭載型護衛艦「伊勢」

航空機搭載型護衛艦「天城」
汎用護衛艦「夕立」「霧雨」「大波」
ミサイル防空母艦「龍神」「水神」

第3艦隊（司令部・舞鶴）

ミサイル戦艦「信濃」
ミサイル搭載型護衛艦「妙高」
ヘリコプター搭載型護衛艦「高尾」
航空機搭載型護衛艦「水城」
汎用護衛艦「稻妻」「五月雨」「巻波」
ミサイル防空母艦「火神」「氷神」

第4艦隊（司令部・呉）

ミサイル戦艦「紀伊」
ミサイル搭載型護衛艦「鳥海」
ヘリコプター搭載型護衛艦「播磨」
航空機搭載型護衛艦「山城」
汎用護衛艦「雷」「曙」「小波」
ミサイル防空母艦「土神」「陽神」

第5艦隊（司令部・函館）

ミサイル搭載型護衛艦「愛宕」
ヘリコプター搭載型護衛艦「乗鞍」
汎用護衛艦「有明」「秋月」「照月」
ミサイル防空母艦「天王神」

第6艦隊（司令部・那覇）

ミサイル搭載型護衛艦「足柄」
ヘリコプター搭載型護衛艦「赤石」
汎用護衛艦「鈴波」「望月」「三日月」

ミサイル防空母艦「海王神」

第1補給艦隊（司令部・横須賀）

ミサイル搭載型護衛艦「敷島」

戦闘補給艦「琵琶」

通常補給艦「十和田」「摩周」

第2補給艦隊（司令部・佐世保）

ミサイル搭載型護衛艦「朝日」

戦闘補給艦「猪苗代」

通常補給艦「常盤」「近江」

第1輸送艦隊（司令部・横須賀）

ミサイル搭載型護衛艦「初瀬」

戦闘輸送艦「伊豆」

通常輸送艦「大隅」「下北」

第2輸送艦隊（司令部・佐世保）

ミサイル搭載型護衛艦「三笠」

戦闘輸送艦「能登」

通常輸送艦「国東」「知床」

海兵特殊強襲艦隊

ミサイル防空母艦「冥王神」

戦闘輸送艦「房総」

戦闘補給艦「丹波」

通常補給艦「浜名」

L C A R K 1号艇

L C A R K 2号艇

L C A R K 3号艇

本編 2011年1月3日～2012年10月7日（後書き）

どうでしょうか。

今回は新しく登場した艦の説明にしたいと思います。

ご意見感想お待ちしております。

軍港（前書き）

長らくお待たせしました。

こちらは新しいものが出るたび、更新していきます。

最終更新日2011年4月20日

軍港

新型艦

敷島型イージス護衛艦

排水量	基準	8 2 0 0 t
	満載	1 2 0 0 0 t
全長		1 8 8 m
全幅		2 3 m
機関	C O G A G方式 二軸推進	
	L M 3 4 0 0ガスタービンエンジン4基	
速力	3 0ノット以上	
乗員	2 5 5人	
兵装	M k . 4 5 5インチ単装速射砲 1基	
	M k . 4 1 V L S（6 1セル＋3 2セル＋3 2セル）	
	S M - 2、S M - 3、V L A、国産巡航ミサイル「	
	飛炎」を発射可能	
	9 0式S S M	4 連装発射筒 2基
	C I W S 高性能	2 0 m m多銃身機関砲 2基
	H O S - 3 0 2	3 連装短魚雷発射管 2基
搭載機	S H - 6 0 K	1機
	S A H - 1	1機
同型艦	4隻（敷島、朝日、初瀬、三笠）	

国産3代目のイージス護衛艦。

純国産イージスシステムをプログラムされ、対空、対水上レーダー兼用のFCS-3Cを装備する。そのほかのセンサー、レーダー、ソナー類も最新のシステム、装置を使用している。

これにより、同時300目標追尾、同時40目標の攻撃が可能にな

った。

イルミネータも4基に増強されている。

兵装面では国産化された巡航ミサイルの発射管制装置をはじめ、VLSの増強を行い、此方も同時攻撃の制限を少なくしている。

固有機として、SH-60K哨戒ヘリとSAH-1哨戒戦闘ヘリを1機ずつ搭載している。

兵装は愛宕型に準拠。

赤城型原子力航空母艦

排水量 基準 95000t

満載 128000t

全長 450m

全幅 137m（船体幅 52m / 発着甲板幅 85m）

機関 COGAG方式 4軸推進

AS1-A原子炉 2基

蒸気タービン 4基

速力 25ノット以上

乗員 4800人（うち航空要員は2800人）

兵装 Mk.41 VLS（61セル）

SM-2、VLAを発射可能

SeaRAM 21連装発射機 5基

CIWS 高性能20mm多銃身機関砲 4基

ESSM 8連装発射機 4基

搭載機 F-3乙型 53機

F-35CJ 20機

F-2C 15機

E-2D 4機

EA-6CJ 4機

SH-60K 7機

CH-47JA 2機

SAH-1 3機

同型艦 4隻（赤城、天城、水城、山城）

日本初の本格的原子力攻撃空母。

6年前から密かに自民党が取得を目指し、根回しをして完成させた空母。

今年度に、赤城首相が首相にならなければ、お蔵入りになるところだった。

強力な自衛、攻撃火器と、国産の戦闘機、F-3の乙型、つまり艦上機型を主力搭載機とし、米軍から輸入したF-35Cを予備役として搭載する。

レーダー類はほとんど敷島型と同一で、隠れイージスシステム搭載艦となっている。

射出装置には電磁カタパルトを採用している。

大和型イージス戦艦

排水量 基準 62000t

満載 72000t

全長 264m

全幅 39m

機関 COGAG方式 4軸推進

LM3000ガスタービンエンジン 8基

速力 30ノット

乗員 620人

兵装 12式45口径460mm 3連装砲塔 3基

12式60口径155mm 3連装砲塔 3基

12式55口径127mm 連装速射砲 6基

12式30? 連装機銃 片舷22基

12・7? 単装機銃 片舷32基
Mk・41 VLS (122セル+61セル+61セル+
122セル)

SM-2、SM-3、VLA、国産巡航ミサイル「
飛炎」を発射可能

90式SSM 4連装発射筒 4基

HOS-302A 3連装短魚雷発射管 4基

CIWS高性能20mm多銃身機関砲 4基

SeaRAM 21連装ランチャー 4基

搭載機 F-3乙型 4機

SH-60K 2機

SAH-1 2機

同型艦 4隻(大和、武蔵、信濃、紀伊)

再び世界最大の戦闘艦として世界に台頭したイージス戦艦。

戦後、その活躍が初めて一般に知られた世界最大の戦艦、大和をモデルに、再び三菱造船によって建造された。

戦闘能力や機動力は現代の最新鋭戦闘艦と比べても随一であり、加えて最大200mmにも及ぶ複合装甲によって、巡航ミサイル「トマホーク」を実験では艦中央構造物に40発受けても戦闘に支障無しという結果が出た。

主砲の460mm3連装砲は、毎分10発という驚異の連射速度で、全4種の砲弾を発射することが出来る。

艦載機もF-3乙型を4機装備し、偵察機母艦的役割もこなす。

レーダー、センサー、ソナー類は敷島型に準拠。

伊豆型戦闘輸送艦

排水量 基準13000t

満載19500t

全長	22.3 m
全幅	3.5 m
機関	COGAG方式 2軸推進 LM3Dガスタービンエンジン 4基
速力	28ノット
乗員	240人（完全武装の陸戦隊員820人を輸送可能）
兵装	12式 60口径155mm単装速射砲 1基 Mk.41 VLS（61セル） SM-2、VLA、国産巡航ミサイル「飛炎」を發射可能。
搭載機	CIWS高性能20mm多銃身機関砲 3基 SH-60K 2機 CH-47JA 3機
搭載艇	エアクッション艇2号型 2隻
同型艦	3隻（伊豆、能登、房総）

護衛に必要な護衛艦の数を減らすために設計された輸送艦。
大和型に装備されている155mm3連装砲の単装版を主砲とし、
ほぼ護衛艦と同程度の火力を持つ。
大隅型と同じく全通甲板で、F-35CJの収容能力もある。（最大5機）
ただし、レーダー類は高波型の派生型を使用し、敷島型のような多目標同時攻撃能力はない。
また、戦闘輸送艦としているが、便宜上命名しただけで、基本的には大隅型の次級のLSTである。
90式戦車5輦、10式戦車 10輦、軽装甲機動車 23輦、高機動車 15輦、73式小型・中型トラック 10輦、73式大型トラック 4輦を同時輸送可能。

琵琶型戦闘補給艦

排水量 基準 14200 t

満載 23000 t

全長 250 m

全幅 37 m

機関 COGAG方式 2軸推進

三菱M134ガスタービンエンジン 4基

速力 28ノット

乗員 180人

兵装 12式 60口径155mm単装速射砲 1基

Mk.41 VLS (61セル)

SM-2、VLA、国産巡航ミサイル「飛炎」を発

射可能。

CIWS高性能20mm多銃身機関砲 4基

搭載機 SAH-1 2機

CH-47JA 2機

同型艦 3隻（琵琶、猪苗代、丹沢）

伊豆型と同じく護衛艦の必要数をへらすために設計された。

兵装やレーダー類は全く伊豆型と同じ。量産性を重視している。

大和型にも使用された20mmの複合装甲を設置しており、ある程度の防御力を持つ。

高波型護衛艦8隻分の燃料と真水を輸送でき、500人ほどの収容能力もある。

風神型ミサイル防空母艦

排水量 基準 13000 t

満載 19500 t

全長 223 m

全幅	35m
機関	COGAG方式 2軸推進
速力	LM3Dガスタービンエンジン 4基 28ノット
乗員	240人
兵装	Mk.41 VLS(244セル+244セル+488セル)
射可能。	SM-2、VLA、国産巡航ミサイル「飛炎」を發
	90式SSM 8連装発射筒 18基
	SeaRAM 21連装ランチャー 4基
	CIWS高性能20mm多銃身機関砲 4基
搭載機	SH-60K 2機
同型艦	11隻(風神、雷神、龍神、水神、火神、氷神、土神、陽神、天王神、海王神、冥王神)

もともと主要都市湾岸に展開し、“移動可能な”固定砲台としての運用を考えて設計、建造されたが、護衛艦の定数上昇に合わせ、汎用護衛艦の割合が少なくなり、そのため秋月型の5番艦以降の就役まで艦隊に組込まれることになった。そのため、機関やその方式も大隅型のような普通方式から、護衛艦のようなCOGAG方式に再設計された。

20年ほど前に米海軍が構想したアーセナル・シップを拡大改良したもので、全976セルのVLSを装備し、FCS-3Cフェーズドアレイレーダーによる多目標同時追尾および攻撃が可能。多目標攻撃能力では、金剛型を凌ぐとも言われている。

伊豆型戦闘輸送艦の設計を元に建造されているが、エアクッション艇のような揚陸艇は搭載しない。

大和型にも使用された複合装甲20mmが貼り付けられている。

準新型護衛艦（物語上では就役している護衛艦）

高尾型ヘリコプター搭載型護衛艦

排水量 基準 19500 t

満載 24000 t

全長 243 m

全幅 38 m

機関 COGAG方式 2軸推進

LM2500ガスタービンエンジン

速力 30ノット

乗員 970人（うち航空要員は320人）

兵装 CIWS高性能20mm多銃身機関砲 2基

SeaRAM21連装ランチャー 2基

搭載機 SH-60K 7機

CH-47JA 2機

SAH-1 4機

同型艦 4隻（高尾、播磨、乗鞍、赤石）

現実に海上自衛隊が取得予定の19500t型護衛艦。

名前は勝手に付けさせていただきました。

母艦としての役割に従事するため、必要最低限の自衛用兵器を除き
装備せず、前型の日向型よりかなり大型になったにも関わらず、建
造費用は同じぐらいとなった。

搭載常用機は7機だが、最大積載数は14機である。（SAH-1
は作者独自の搭載機のため除外）

軍港（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

本編 2012年10月8日（前書き）

お久しぶりです。

戦闘機の更新内容は全くの想像ですのでご容赦を。

また途中まで英語ですが途中から日本語に戻ってます。これは別にめんどくさかったからではありません。

ではどうぞ。

本編 2012年10月8日

2012年10月8日 AM10:15 航空自衛隊嘉手納基地

海上自衛隊の大量艦艇進水・就役の次の日、航空自衛隊の嘉手納基地では、40機余りの新型国産戦闘機、F-3「心神」が納入されようとしていた。

もともと米軍基地であった嘉手納基地は、赤城が首相になった後すぐに行われた国会で集団的自衛権を認める旨と、自衛隊の増強を開始することを発表した直後、突然の米国国防省の会見で返還が発表された基地である。ちなみにこの時発表された返還基地は嘉手納のほか、横須賀、那覇、厚木、横田、普天間がある。これら在日米軍主要基地の返還は、これから短期間での日本からの撤退を否が応でも考えられる内容であった。

……だが、飛行場を増やしても、日本の戦闘機は総数でも400に届かない。なのでこれを機に戦闘機を増やしてしまおうとする風潮が広まった。

そこで、前々から計画されていたF-XやF-XXの選定に急務がおかれたのであるが、F-Xの対象となるユーロファイターやF-35はF-4EJの耐用時間的問題から全却下され、F-2A/Bの緊急生産で乗り切ることになった。またF-15J/DJの後継を選定するF-XXでは近隣諸国の第5世代戦闘機的大量配備に影響され、日本でも第5世代戦闘機を導入しようとする動きもあったが、アメリカは依然としてF-22の輸出を拒んでいた。すると自然に日本が取るべき選択肢は1つにかたまっていき、最終的には先進技術実証機であるATD-X「心神」を戦闘機として開発することになったのだ。そのため、これまでチビチビと研究・開発しかできなかったATD-X転じてF-XX研究チームに、優先的に多額の開発費用が投入され、本格開発開始からわずか1年で、量産可

能機にまで仕上げた、第5・5世代戦闘機XF-3「心神」が完成したのであった。

それから3カ月。

「来たぞ!!」

滑走路の脇で待機する航空訓練を終了したばかりのパイロット、約50人の内の1人が空を指差す。皆もつられてそちらを向くと、ジェットエンジンの轟音とともに、戦闘機の編隊が西からとんでくるのが見えた。

飛んでいる戦闘機はF-3甲1型・2型要撃制空戦闘機が計40機。念願の純国産戦闘機である。

甲は航空自衛隊機を表し、1型は単座、2型は複座を表している。ATD-Xのころより2回りほど全長が大きくなっているが、全体的にF-22などよりも小型である。

だが、胴体内部にあるウエポン・ベイはF-22Aの約1.5倍相対に達し、F-15Eストライクイーグルと同程度の対地爆撃能力も有する。

さらにステルス性能・機動性能は両方ともF-22を凌駕し、特に機動性能では第二次大戦時中の零戦と真面目にドッグファイトができるほど。（あくまで理論上だが）

戦闘行動半径は、これまでの日本が保有する戦闘機より大幅に向上し、最大で中国の南京にまで侵攻することができる。

また戦闘機を開発する際必ずもめるエンジンはこれも純国産エンジン三菱RF-1000（推力15t）を使用し、これでアメリカに頼る部品が全くなかった。

また今回納入される機体はF-15Jの後継などではなく、純粋な配備増に向けた戦闘機である

そうこうする内に40機のF-3は次々に滑走路へ近づき、着陸していく。

真黒に塗装されていながら、どこか輝きがあるその機体は、滑走路

を500m進んだだけで停止した。短距離離着陸能力も付与されているのである。

今回嘉手納基地に配備された40機は高等練習機での訓練を終了したものに与えられる機体であるが、まだ実戦配備なわけではなく、機種転換訓練機や初任機訓練機である。だがその訓練に合格し卒業した訓練生には、実戦での操縦任務が与えられ、晴れて実戦配備の機体として嘉手納基地におかれることとなるのだ。

だから“少なくとも”実戦で活躍するまで1年はかかるのであった。そんな初任機訓練生の中、1人の青年がF-3を見上げていた。

「これが俺達の機体か・・・。」

遠藤拓真。

先月練習生を卒業した3等空尉である。

航空自衛隊では（どこの国でもそうだが）漫画のように、1人1人に戦闘機が割り当てられているわけではなく、その日によって違う機体を使用している。もっとも、機付員（機体1つ1つに配置される整備士）は自分専用の整備機体があるが・・・。

だから“俺達の”なのである。

全機のF-3甲1型/2型が着陸すると、コックピットから納入のためにここまで操縦してきた三菱重工の社員が降りてきた。

この戦闘機を操縦できる社員はもとも航空自衛隊のパイロットだったんだとか・・・。

社員が滑走路に一列に並ぶと、訓練生は一斉に敬礼。

社員もきつちりした航空自衛隊の敬礼を返してくれた。やっぱり空自出身なのだろう。

彼らも航空自衛隊初の純国産戦闘機に乗ることができてうれしいのだろうか。配備されるだけで十分うれしいと思うが。

それから30分後、基地の中で話をしていたらしい社員たちは、迎えに来た本社のバスで、帰って行った。

明日からは厳しい実機による訓練が始まる。

絶対に脱落せずに実戦任務に就こう。そう改めて思う拓真だった。

同日 PM 2 : 15 海上自衛隊厚木航空基地

航空自衛隊にF - 3 甲1型 / 2型「心神」の納入が終わった日の午後、約1カ月前に陸上訓練を終了した海上自衛隊の原子力空母「赤城」の第1空母戦闘航空団艦載機、F - 3 乙1型 / 2型 / 1E型「零」の最終着艦訓練が開始されようとしていた。

海上自衛隊の戦力を大きくさせたい意向を上層部が持っていたため、航空自衛隊より早く純国産戦闘機の配備が終了していたのである。単年度予算の戦闘機調達用予算の中に1度に600機分の予算が入れているのだというのだからすごい。まあ裏でのお金の動きもあるのだろう。そうでなければ今年度の予算は去年度の2倍以上になる。その半分が防衛関係の予算になって。

さて、最終訓練は洋上に待機する「赤城」と厚木基地の中間点に戦闘訓練空域を設定し、あらかじめ組んだペアでの2対2の戦闘訓練をしてからの着艦訓練である。

この訓練が終了すれば、パイロットたちは正式に海上自衛隊の戦闘機乗りとして赤城に配属されるのでみな少し緊張気味だ。

そして訓練開始時刻になると、厚木基地の2438mの滑走路をほとんど使わず次々と洋上迷彩を施されたF - 3 戦闘機が離陸していく。航空自衛隊は真黒な塗装だったが、区別のためF - 2とほぼ同色である。

53機のF - 3と20機のF - 35CJ、15機のF - 2B改全てが離陸すると、先ほどまで三菱RF - 10000のエンジン音に包まれていた厚木基地には静寂が戻り、時折離着陸するヘリコプターの音だけが聞こえていた。

同日 PM 2 : 50 浦賀水道上空

『This is F-3 01. Fight on!! (こちらF-3、01号機。教練戦闘開始!!)』

『02 roger. Target α left 250. 700m! (02号機、了解。目標α、左250°。距離700。)』

『01 roger. Target rock on. Fox 1 AAM-5 fire!! (01号機、了解。目標ロックオン。フォックス1、AAM-5、発射!!)』

機内のウェポン・ベイに収納されたAAM-5(04式空対空誘導弾)が射出され、敵機役のF-3、03号機にまっすぐ飛んでいく。・・・という電気信号が03号機に送られる。もちろん信号だけであつて実弾は発射していない。今頃03号機ではロックアラートが鳴り響いているだろう。

『AAM-5... Target α kill!!... Target β back 0!! 200m!! (AAM-5... 目標α撃墜!!... 目標β、後ろ0°!! 距離200m!!) やばい! 後ろを取られた!!』

とたんにヘルメットからロックアラートが鳴り響き急上昇に転じる。ほぼ0距離移動で145°の急旋回をかけ、一気に04号機の後ろに回り込む。推力偏向パドルを装備するF-3でないとできない芸当だ。だが相手も同じ機体と同じぐらいの技量を持ち合わせているため、なかなかロックができない。すれ違いざまに20mmバルカン砲も撃った(もちろん電気信号)が撃墜に至らない。そして04号機は、後ろに01号機を貼りつかせたまま、急降下し、01号機の真下で1回転して01号機の真後ろに再び貼りつく。そして01号機のパイロットがしまったと思う間もなく、01号機は04号機の20mmバルカン砲によって撃墜判定が下された。

このような訓練を3、4ラウンドほど繰り返し、次に空母赤城への

着艦訓練に移る。

『赤城へ。こちらF-3、01号機。着艦申請を行う。』

『F-3、01号機へ。こちら赤城。着艦許可を与える。方位080から角度30で侵入を開始せよ。風が少し強い。気をつける。』

『了解。方位080、高度800から角度30で侵入。』

キィィィ——ン

空母との相対速度に気をつけながらゆっくり（実際にはマッハ0.7位だが）降下する。下に降りることに原子力空母赤城の広い飛行甲板が目の前に広がる。高尾型や日向型の2倍以上はあるのだから当たり前だが。

残り10mをきると、一気にエンジン出力を抑える。すると数秒後に車輪が甲板に接地する振動が機体を揺さぶり、機体下部に装備された強制停止用のフックが飛行甲板に展開されたワイヤーに引っ掛かる。そして機体は完全に停止した。

『機体チェック・・・安全確認よし。』

最後にというとキャノピーを開放し、ヘルメットを脱ぐ。梯子を使わずに機体から飛び降りると01号機のパイロット、如月雄太2等海尉は艦右舷のエレベーターに運ばれていく自分が乗っていたF-3を眺めながら、続々と降りてくる戦闘機を見つめる。全部で90機にも及ぶ戦闘機を全部着艦させるには少なくともまだ30分はかかるだろう。

ふと今着艦体勢に入った1機のF-3を見据える。

04号機。

先ほどの戦闘訓練で完敗した相手だ。数分で着艦を終えると中からパイロットが出てくる。

ヘルメットを脱いで現れたのは黒く長い髪を持つ女性海上自衛官だった。

ちなみに結構な美人である。

あとで話しかけてみようと考えながら、航空要員作戦室へと向かった。

作戦室から出た雄太は説明された任務を頭で整理しながら、今後のことを考えていた。

明日から海上自衛隊の全艦艇が日本海に集まって11月中旬に行われる観艦式の予行演習が行われることになっている。そのため約1カ月は陸へ戻れないのだが、別にそれはいい。

そのあとに言われた中国の様子だが、アジア初の空母習得を目指していた中国は本当に突然就役した日本の世界最大の空母4隻を目の当たりにして怒り狂っているそうだ。その中国国内では地下ドックで2隻に大型空母を建造していると考えられているが、どちらも米軍にさえ匹敵するものではなく、そこそこの威容になると思われる。

そこへ中国間近の日本海に海上自衛隊の全艦艇（輸送艦等含む）が集まるのだから、もしかしたら戦闘が起こるかも知れないのだ。そこでなんと政府はその可能性を踏まえ、全艦艇に使用制限ぎりぎりの量のミサイル、弾薬を積み込み、演習を行うことを許可したのだ。ほとんど戦場に派遣されるようなものである。もしかしたら政府はその偶発的な戦闘を望んでいるのかも知れない。観艦式は太平洋で行われるのだから、日本海で行う意味が全くないからだ。

まあ物騒なことは考えないでおこう。今回は初めて戦艦や空母が登場する観艦式なのだから、絶対に成功させなければ。と自分に言い聞かせ、雄太は航空要員居住区画へ向かった。

本編 2012年10月8日（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

本編 2012年10月9日（前書き）

ずいぶん遅れました。

昨日まで中間考査だったもので・・・

いろいろ突っ込むところはあると思いますが、
どうぞ。

それと陸自シーン短すぎです。ごめんなさい。

本編 2012年10月9日

前話までに航空自衛隊と海上自衛隊の話があつたので、今回は陸上自衛隊の話だろうと思う読者もいるかもしれない。事実陸上自衛隊の話があるわけなのだが、なにぶん作者には普通科以外の戦車科や特科の知識は全くと言っていいほど無い。これっぽっちも無い。なので、中には「こんなこと言わないだろww」とか思う方もいるかもしれない。だがそこはどうか甘く見てほしい。だって……インターネットには載ってないんだもん！！

陸上自衛隊でも赤城政権による装備更新、新装備の配置が早急に行われていた。特に東北以南の戦車や偵察ヘリ、戦闘ヘリの更新はもっとも力を入れて行われていた。

もちろん全国でも同様の更新は急速に進んでおり、今現在は現役の74式戦車より10式戦車のほうが多いというところまで来ている。2011年には戦車200輜削減とか言っていたのにこれは無かつたことにされたようだ。また90式戦車は全車10式戦車と同等の44口径120mm滑空砲に換装され、火力が段違いとなっている。また新設された第16、17師団(第9、15は旅団となっているため)ではより大火力の55口径120mm滑空砲を装備した10式戦車が各1連隊分組込まれ、日本戦車と外国戦車の差を更に広げるに至った。そして新設の第18師団はというと、10式戦車320両を有する機甲師団として中国地方に駐屯している。機甲師団というところまで日本には対ソ連を念頭に置いた第7師団しか無かったが、それもようやく終わった。ちなみに第7師団にも新しく80輜の10式戦車が配備されていたりする。

閑話休題

2012年10月9日 PM2:15 東富士演習場

富士総合火力演習にも使用される東富士演習場で訓練を行っているのは第1師団駒門駐屯地所属の1個戦車中隊全14輜である。この中隊にはついこの間まで74式戦車が配備されていたが、上にも書いたように、74式戦車の更新により、10式戦車へ全車が更新されたのである。

「第1」18目標設定、敵戦車18輜！」

10式戦車に搭載されたC4システムにより、普通科や戦闘ヘリによる情報がリアルタイムで目の前のディスプレイに標示される。今回は戦車中隊のバックアップに来た立川駐屯地のOH-1Aが情報を送信している。このOH-1Aは未だにOH-6Dからの更新が進んでいなかった各飛行隊に配備されたOH-1の改良型である。改良点としては主に武装の強化と後続距離の増加なのだが、これはまた別のときに説明しよう。

「発砲用意！！ 弾種徹甲弾！！」

砲手がディスプレイ上に点在する赤い光点をタッチすると、それで発射準備が整っていることになる。主砲の真横に設置された赤外線センサが主砲と敵戦車の位置関係が1直線になったことを確認した瞬間、砲弾発射装置に信号が送られる。

「撃てエー！！」

その瞬間44口径120mm滑空砲が火を噴く。100m離れた所でもその威力を実感できる圧力で発射された10式120mm徹甲弾がまっすぐに演習上に設置された白い的に向かい、それを破壊する。

もちろん位置関係が1直線になったとしてもその間を丘陵がさえぎったりしていれば砲弾は発射されない。発射に関えば、戦車の目標設定だけしてやれば後はセンサ任せにできるのだ。もっとも、訓練では手動で行うのがセオリーだが。

演習上設定された敵目標は戦車38輜と潜伏兵820人であり、行動目標は敵軍敷地に取り残された仲間の救助だったのだが、またたく間にそれらを駆逐し、行動開始後30分で作戦は終了した。

同日 PM3:30 津軽海峡

前日の午後、出航したイージス戦艦「大和」以下第1艦隊、第1補給艦隊、第1輸送艦隊は、1時間前に出航した第5艦隊と合流し、津軽海峡を横断していた。

今日になってから入った通信によれば、今年の観艦式をどうにか全艦艇を使用して行いたい、その間他の地域が手薄になるためどうしようかと悩んでいる上層部が、苦肉の策として提案した、「それなら日本海側に全部集めればいい。」作戦が今回の日本海での予行練習だったのだ。

明日になれば佐世保や呉、舞鶴の艦隊とも合流できるし、明後日には那覇の艦隊も合流する。

あ、そうそう。

今年の初めに、海上保安庁は解体され、巡視船は巡視艦と名を変えて海上自衛隊の艦艇として行動している。もともと指揮系統が一元化されただけで、防衛省海上保安部として対処をしている。これは2010年の尖閣諸島事件の反省で、巡視船の装備不足が挙げられたからである。現在、順々に巡視艦がドック入りし、対水上、対空レーダーの追加装備や、兵装の強化（たとえば127mm砲の装備など）、データリンク、IFF、戦術航法装置の導入を行い、運用能力を上げている。

特に、ただ1隻だけある大型巡視艦「しきしま」はCIWS2基の追加、35mm連装機関砲、20mm機関砲の撤去をする代わりに127mm速射砲を2基追加、さらにESSM8連装ランチャーを1基、90式SSM2連装発射筒を2基装備させた、まさに重巡とでもいべき巡視艦となり、新たに8隻の建造がはじまっている。・・・とはいえ白い船体を持つ巡視艦が対艦ミサイルを撃つ光景は

シユール以外の何ものでもない。

また今回の観艦式で護衛艦がいなくなるため、各管区では通常業務の他に護衛艦としての任務も一時的とはいえ負うことになる。

ちなみに、巡視艦のほとんどは新型のディーゼルエンジンに置き換えられており、ガスタービンエンジンにも劣らない性能を持っているため、そこまで支障はないと思われる。

閑話休題

そうして津軽海峡を抜けた時だった。イージシステムを搭載している艦の中で、1番広い索敵範囲を持つ「大和」のレーダーが国籍不明機をとらえた。

「対空レーダーに感！！ 全7機！！ 領空識別圏に入っています！！ 進行方向はこちらに1直線です！！」

「空自は何をやっているんだ？ 艦載機格納庫へ通達。偵察機2機発艦用意。AAウエポンパックを搭載しろ。」

『艦載機格納庫、了解しました。』

「大和」の艦尾格納庫には3機のF-3乙2型戦闘機が搭載されている。

スクランブルでは無いが、艦橋の命令から4分で発艦ができる状態になる。「赤城」ではスクランブル機が待機していて、1分で発艦が可能になるが、同時に2機しか用意していないため、7機の国籍不明機に対して不利な可能性がある。だから「大和」でも発艦準備をしているのだ。

きっかり3分後・・・

『後部発着甲板から艦橋。発艦用意、完了しました。』

「御苦労。ただちに発艦させよ。」

『了解。』

キイ——ン……………

「大和」後部甲板に2基設置された55m級の強制電磁カタパルトにそれぞれ1機ずつのF-3乙2型戦闘機が配置され、エンジンの

出力を上げ始めた。総重量34tの戦闘機を確実に発艦させるために改良された強制電磁力カタパルトは戦闘機が耐えられる急加速ギリギリの速度で機体を打ち出す能力を持つ。

『発艦20秒前!!』

「大和」のレーダーは未だに領空識別圏に入っただまの国籍不明機をとらえている。レーダーの周波数を確認したところ、ステルス機である可能性が高く、本土の防空レーダーでは探知できていないと考えられた。

『発艦10秒前!!』

戦闘にならないことを祈りたい。

『発艦まで5、4、3、2、1、発艦!!』

ズッシャアア――!!

カタパルトが起動し、4人の青年が、また空に飛び込んだ。

Side F-3乙2型 大和01号機

「発艦!!」

そうコールした瞬間ものすごいGが体にかかった。何度やってもこの瞬間はふらふらする。

俺は大和01号機のRIO（Reader Intercept Officer）、草薙理雄2等海尉。名前もRIOである。航空自衛隊の戦闘機パイロットになるために入隊したわけだが、なぜ海上自衛隊に引きずり込まれ、がつくりしているところを大和型か赤城型にどうかと誘ってもらい、「大和」の戦闘機乗りになったのである。

前の席に座る小野間武2等海尉は海保の父を持つ操縦者である。多分大和型に搭乗している航空要員の中では1番の腕なのではないだろうか。空自のF-15Jの4機編隊を1機で撃墜した記録を持っているという。

その小野間は今カタパルトから撃ちだされたF-3を海面に激突しないよう制御して一気に高度3000まで上昇させた。

「機体各部に異常なし。発艦成功を確認。及びレーダー上にIFF反応のない機体は無し。ラインA-2を使用せよ。」
「了解」

俺が機体の状態と周囲の状態を確認して小野間に報告すると、小野間は機体をA-1からA-2の方角へ旋回させた。A-1は赤城のF-3が向かった方角で、A-2はステルス性能を生かした挟み撃ちの攻撃をするための航路だ。

「IFF無反応の機体を確認。例の国籍不明機です。」

F-3にはF-2支援戦闘機に搭載されたレーダーの数段階上の性能を持つ国産フェーズド・アレイレーダーを搭載している。F-22さえ索敵できるこのレーダーで検知できない機体を俺は見たことがない。

「機種は特定できるか？」

ふと小野間が俺に聞いてきた。

「は・・・いえ、ちよつと待ってください。」

F-3本体のコンピュータには入っていないようなので、「大和」にあるリンクを通じて検索をかける。日本海側を飛行する国籍不明機の国籍など、タカが知れている。

「レーダー派、形状からのヒットは1件。中国の殲20です。」

「厄介だな。」

性能的にならF-3が圧勝である。しかし、殲20は中国人民解放空軍の最新鋭機である。自国の技術を高く見すぎてなかなか領空から出ていかない可能性があるのだ。

「赤城艦載機、肉眼接敵まであと10秒です。」

もしここで攻撃されれば自衛攻撃の口実ができる。だがその後の政治的なゴタゴタを考えると、攻撃されないほうがいいに決まっている。

「赤城01、02号機接敵。攻撃された様子はありません。俺達も接敵まで20秒です。」

『こちら赤城02号機。これより音声による警告を開始する。』

「了解。こちらも合流し次第交代する。」

「全兵装システムロック解除。こちら大和01号機。これより音声による警告を開始する。」

『こちら日本国海上自衛隊。ここは日本のりよ』こちら中国人民解放空軍。ここは中国の領海とその領空である。ただちに艦隊を撤退させ、退却せよ――』どうなっていやる!!』

「構わん。続ける。」

『こちら日本国海上自衛隊。ここは日本の領空である。ただちに撤退せよ。さもなくば撃墜する。』

『こちら中国人民解放空軍。ここは中国の領海とその領空である。ただちに艦隊を撤退させ、退却せよ。さもなくば攻撃する。』

中国はついに日本海上空を自国の領空だと言い始めた。

一体中国は何がしたいんだ!?

それから数分間音声による牽制が続いたが、ついに中国軍機が威嚇射撃・・・攻撃を開始した。こちらにも負けじと威嚇射撃をするが威嚇になっていない。撃墜許可をもらおうと「大和」に連絡を取ろうとしたとき、「大和」から通信が届いた。

『こちら大和CIC。現在作戦中の海上自衛隊機に達する。市ヶ谷から緊急連絡が入った。』

防衛省と近くの空自基地へはレーダーに殲20がとらえられた直後に連絡を入れている。

『いきなりで悪いが・・・1600時になっても敵機が退却しない場合に“撃墜”の許可が出た。またそれでも退却しない場合は“殲滅”をしてほしいそうだ。』

俺だけではなく小野間から、そして他のF-3のパイロットからもぎよつとした雰囲気ヘルメットを通して感じた。

“殲滅”? 7機全機を墜とすつてのか?

「・・・了解。」

「小野間!!」

一番早く沈黙を破ったのは小野間だった。

「お前・・・本気かよ？」

「本気にならなきゃだめだ。それに1600時まであと2分。何とかして退却させれば撃墜の必要はなくなる。」

もつともその可能性は低いとわかっていて小野間は言っている。それがしようがないというように。

「了解。引き続き警告を行う。大和02号機、赤城01、02号機。話は聞いたな？ 1600時に作戦開始。それまで全力で警告を行う。」

『『『了解!!』『』『』』

だがその後2分間、中国軍機は退却すること無く1600時になった。

「・・・戦闘状況を開始する。赤城飛行隊は前の3機、俺達大和飛行隊は後ろの4機をロックする。」

F-3の戦闘システムは基本的に一度で4機にロックが可能である。使用するAAM-5もそのシステムに合わせた改良型が使用されている。

「ウエポン・ベイ解放。敵機α、β、γ、ロック!! AAM-5、発射!!」

F-3乙2型の胴体下のウエポン・ベイから、3発の04式空対空誘導弾が放たれた。

そして中国との関係を崩す槍も同時に放たれた。

小野間

「おれまだ全然話してないのに・・・。」

草薙・如月・滝・芽野・狩野

「ご意見、ご感想お待ちしてまゝす!!」

小野間

「・・・おい。」

本編 2012年10月9日 其一（前書き）

長らくお待たせしました。成績不振でパソコンの使用が制限されて
いましてですね・・・

ま、言い訳はさせてください。

今回ですが、戦闘機の戦闘描写は難しいっ。かなり下手です。
あと新しいジャンルをつけてみました。後悔はしていません。

ではどうぞ。

本編 2012年10月9日 其一

Side 草薙理雄

パシユツ！！ パシユツ！！ パシユツ！！

俺達の機体から発射された3基の04式空対空誘導弾は、赤外線シーカーを作動させると、まっすぐ中国機に向かい、多素子シーカーによる赤外線画像識別装置も作動させて、慌てて回避行動を取ろうとフレアを射出する殲20に容赦なく鉄槌を下す。

発射したミサイルは全基命中し、7機中3機が大小の破片となって日本海の荒波にのみこまれる。パイロットは2機分だけ脱出できたらしい。

赤城01・02号機のミサイルも4基中3基が命中し、中国機は炎に飲み込まれた。

残っている中国機は1機だが、まだ退散する気が無いらしい。こちらにバルカン砲を撃ってきた。推力偏向パドルを使った高機動でその弾丸の軌道から逃れると、中国機の真下で1転して上昇し・・・赤城04号機がとった機動と同じだ・・・真後ろを取る。そして、

「二度と来るな！！」

HMDのど真ん中にとらえた殲20に向けて、俺はJM61 20mmバルカン砲の射撃スイッチを押した。

機首に搭載されているバルカン砲が毎分3000発の速度で火を噴き、まっすぐ敵機体に向かった曳航弾混じりの20mm機関砲弾は機体エンジン部に被弾損傷を与えて機体を爆発四散させた。

「作戦終了。敵影無し。これより艦に帰投す」

『了解。戻ったらゆっくり休んでくれ』

中国軍機を撃墜するという日本の戦後初の出来事を終えた俺たちは十数分後、大和艦内の自室でこれからどうなるのかを考えていた。全長250mを超えるこの艦では、航空要員、海上要員含めてすべ

ての3曹以上の隊員に個室が与えられている。だが俺の部屋にはもう1人の人物がいた。いや、人物というのはおかしいかもしれない。なぜなら彼女はこの艦そのものなのだから。彼女の名前は「大和」。俗に言う艦魂というものである。昨日艦内で迷ってしまったとき、偶然見つけた彼女を乗艦している女性海上自衛官（WAVE）だと思っ て話しかけたのだが、なんで見えるの？、私はWAVEじゃないなどと話が噛み合わず、偶然通りかかった小野間に彼女の話をしたところ、

「幽霊を見るような目で、

「おまえ・・・ここにはお前しかいないぞ？」

という心霊まがいの言葉を頂いてしまい・・・こいつは艦魂か？との考えに至った。

小野間と彼女がグルでふざけている可能性もあったので、これまた偶然通りがかった艦長に小野間と同じこと尋ねたのだが、答えも小野間と同じであった。だが艦長はこう付け足してくれた。

「そうか、君は艦魂が見えるのか。だったら彼女に頼んでくれ。どんな攻撃からも乗員を守ってやってくれ、とな。」

その時彼女は大きくうなずいていた。艦長も彼女が見えるかのように目を彼女に向けていた。一応信じることにした俺は、なんとなく自室についてきた彼女とすっかりうちとけ、今日も部屋の中で待っていた彼女とダラダラと話していたのだった。

「撃墜なんてよくやったじゃないの」

「いや。歴史的に見ても政治的に見てもまためんどくさい世論がどうのとうるさいからな。もしかしたら殺人罪とかで裁かれるかも・・・。そしたら艦を離れて・・・うわあ。いやだな・・・」

「確かにそれはいやね。命令されたから攻撃したのに後から責められるなんて」

「そうじゃないことを祈ろう。そういえばお前ここに来るまでどこで暮らしてたんだ？」

「ん」。第3甲板の下にやけに広い空間があるでしょ？」

「ああ。確かにあるな」

「そのどこかに私の部屋の入り口があるわ」

「・・・どこだよ？」

「もうっ／＼／ レディーの部屋をそんな簡単に教えるわけないでしょ。ところであなた夏休みはどうするの？」

「俺の部屋は知ってるくせに・・・。ん？ 夏季休業か。何も考えてないからな・・・。親ももういないし、別に会う予定のある人もいないし。このまま艦の中にいるかな」

「へ、へえ。じゃあ、退屈なさそうね」

「あんま他の人がいるところで話しかけるなよ。返答できないからなぜかこの娘が見えるのは艦内で俺だけである。他の艦にも見える人はいるのだろうか。」

「むー。分かったわよ。その代わり今日アイスおごつてよね」

「・・・艦魂なんだから勝手に取ったってバレねえだろ・・・。」

「あんたねえ。補給料の隊員を困らせたいの？」

「そつえばそうだな。・・・すみませんでした」

それから小一時間ほど彼女と駄弁っていると、中国軍機を撃墜したことで暗くなっていた心がゆっくりと明るくなっていった。

「あ、そろそろ明日の観艦式演習最終確認の時間じゃない？」

「うわ！！ しまった、休みすぎた。じゃ、またあとでな」

時間を忘れていた俺はあわてて通路に出ると、後部飛行甲板まで全力で走って行ったのだった。

・・・小野間に睨まれたのは言うまでもない。

Side「大和」C I C P M 17:30

「艦長、横須賀群司令部より入電」

「・・・読み上げてくれるか？」

「短いですよ？ 発横須賀群司令部、宛観艦式演習中の全艦艇。中国との緊急会談が終了するまで現地点にて演習続行。帰投命令あるまで帰投を禁止する。なお、この命令は首相からの正式命令。だ

そうです」

「わかった・・・。君はそろそろ上がりなさい。夕食がまだだろう」
「ありがとうございます。では」

艦長に電文を読みあげていた通信員は、もと来た道を戻ってCICからでていった。

「一体どういう意味なのでしょう。中国の脅威に備えて暗に戦闘待機を命じているのか、それともただ単に邪魔だから・・・？」

「いや。赤城首相はそんな人ではない。純粹に中国軍を警戒しているのだろう。幸い、海自全艦艇が集まっているから負けることはないはずだ」

「それ自分で言うことですか？ 艦長」

「ハハハ。それだけ君たちを信用しているということだ。喜びなさい。海上自衛隊が世界に誇る海軍であることくらい分かっているだろう」

「まあ、そうですね」

「さて。私はそろそろ艦橋に戻るよ。航海科の新米を見てやらなくちゃな」

だがこの時、大和の対水上レーダーでは異様なほどの日本船籍の漁船をとらえていた。

「艦長、戻るまでに少しよろしいですか？」

「なんだ？」

レーダーを監視するレーダー員が艦長にことわりを入れてから報告する。

「我々の艦隊の周囲を航行する漁船に不審な点が・・・」

「中国船籍か？」

「いいえ。日本船籍名なのですが・・・」

そこでレーダー員は手元のキーボードを叩いて、ディスプレイに問題の漁船の識別番号と、ある資料を標示させ、照らしあわせた。

「これは・・・！！ 全部行方不明の漁船じゃないか！！」

そう。レーダー上に写る漁船は、ここ十数年で急増した行方不明漁

船の識別番号だったのだ。

「艦隊全艦に通達！！ 周囲の漁船は皆不審船！！ 対応急げ！！
総員配置！！ 総員対水上戦闘用意！！」

「対水上戦闘用意！！」

艦内にアラームが鳴り響き、非番のものもすぐさま自分の配置につく。艦内がにわかに騒がしくなった。

「主砲、副砲及び高角砲、三式弾装填。トラックナンバ1688から1695に設定。SSM及び魚雷にも目標設定」

「首相官邸及び防衛省に連絡。詳細も逐一報告せよ」

「各兵装システムオールグリーン。三式弾装填よし。ミサイル、魚雷ともに目標設定入力完了。いつでも撃てます！」

「早まるなよ……。赤城に連絡。早期警戒機とF-2を上げる」

「すでに上がった模様です」

「CICから艦橋へ。進路そのまま、最大戦速！！」

『よーそろー！！』

「ぎ、漁船より小型目標分離！！ 高速で本艦隊に向かっていきます
！！」

レーダー員から悲鳴のような報告が上がる。

「ミサイルか！？」

「断定はできませんが、対戦車ミサイルではないかと！」

「やむを得ん。1番主砲にて三式弾発射！！ ただし目標は対戦車
ミサイル」

「了解！！ 主砲、撃ちい方…始めえ！！」

「撃ちい方始めえ！！」

砲雷員がコンソールの下に収納してあるトリガーを取り出し、引き金を引く。その瞬間、過去も現在も世界最大の主砲、12式45口径460mm3連装砲が吠え、艦全体に衝撃が走った。就役前に鹿児島沖で試射を済ませてはいたが、やはりこの衝撃は乗員の心に大きく響いていた。

「大和」の3つの主砲の内、一番艦首に近い砲塔から撃ち出された

三式弾は、海面をなめるように進むと、あらかじめ設定された位置で爆発した。すると996個の焼夷粒子からなる火花が開き、その中に突っ込んだ対戦車ミサイルを爆発させた。

大和型以外の咆哮兵器では決してできない平面での迎撃兵器である。

「目標撃墜！！」

「敵船に第5艦隊、愛宕が接近し警告した模様」

「対空対水上警戒厳となせ！」

『ソナー室からCICへ。中国原潜と思われる音紋をキャッチ！深度400、目下監視中です！！』

音紋とは潜水艦ひとつひとつ違うエンジン音である。同じタイプの同じ型の艦が同じ造船所でエンジンを積んでも違う紋になるため、潜水艦の指紋とも呼ばれている。

「艦種はわかるか？」

『音紋データに参照したところ晋級原子力潜水艦に近い音紋です』

晋級とはSLBM発射装置を12基そなえた弾道ミサイル潜水艦で、中国海軍の中では新しい部類に入る艦である。

「こんなとこまで入りこまれていたか……。対潜戦闘用意！！」

使用兵器は07式投射魚雷」

「07アスロック、目標設定データ、入力完了。前部VLS第4セル、解放します」

「防衛省から入電！！」

「読みあげる」

「はっ。発防衛大臣石田幸平、宛第1艦隊旗艦「大和」。日本の領域を侵し、艦隊に危害を加えるものに対し、断固とした攻撃の許可を与える。これは首相の意思でもある。目標を設定し次第、攻撃せよ。です」

「会談は嵐のようだな。・・・07式投射魚雷、攻撃始め！！」

「撃てえ！！」

水雷員がコンソールのタッチパネルに触れ、07アスロックを発射させた。

ロケットモーターに点火して第1VLSから飛び出したアスロックは、超音速で水中に隠れる目標上空まで飛翔し、弾頭を切り離した。切り離された弾頭・・・97式短魚雷はパラシュートによって減速しながら着水し、ウォーターポンプジェットを起動させて目標まで高速で接近する。「大和」のソナー室では急速転舵を行い、デコイを作動させている晋級原潜が感知されていた。だが97式短魚雷は惑わされることなく133mの鯨の横腹にそのからだをぶち当て、深度400mで巨大な圧壊音を響かせた。

『目標に着弾。圧壊音を検知。撃沈しました』

「大和」CICでは静かな歓声が響いた。だがそれも長く続かない。「領海内に新たな水上目標。距離1万2000。中国海軍の駆逐艦と思われます」

「まったく。この艦隊に駆逐艦1隻で来るとは・・・こちらも攻撃しにくいではないか」

「愛宕、金剛が無線とスピーカーによる警告を行っていますが、応答はありません」

「駆逐艦より小型目標分離！ あ、いえミサイルではなくて対潜ヘリかと思われます」

「対空対水上戦闘用意。手始めにヘリを叩き落とす。CIC指示の目標、高角砲撃ち方始めえ！！」

「撃ち方始めえ！！」

「大和」の高角砲は正式名称12式127mm連装速射砲で、射程27km、毎分80発の発射速度を誇る対空砲である。この高角砲が大和型戦艦には片舷3基つつ装備され、その他の対空機銃とともに航空機からの脅威から艦体を守っている。

右舷側の3基が火を噴き、その砲口から初速870m/sで6発の127mm対空砲弾が発射され、220km/hで飛行していた中国の哨戒ヘリ、Z-9Cは6発の砲弾に逃げ場を失い撃墜された。

「全主砲撃ち方用意。目標は中国駆逐艦・・・だが至近弾になるよう調整」

「脅しですか？」

「これで逃げるなら軍艦は要らないよ・・・」

「ですが460mm徹甲弾が一度に9発も迫ったら、駆逐艦もたまったものじゃないでしょう。効果はかなりあると思いますか？」

「そう願おう。これ以上刺激するのも得策とは言えないしな」

「1番から3番主砲、撃ち方用意よし」

「撃ちい方始めえ！！」

「撃ちい方始めえ！！」

艦が僅かに揺れた。「大和」が搭載する全9門の主砲が斉射されたのだ。むしろ僅かに揺れただけで済むのがおかしい。これも「大和」が巨大な戦艦だからこそこできることであつた。

そして十数秒後、駆逐艦の周りに砲弾が着弾し、それだけで転覆しそうなほどの大きな水柱ができた。その威力と射撃の正確さに驚いたのか、駆逐艦の進行はしばらく止まり、第5艦隊の護衛艦が再度退去の勧告をすると、すごすごとひきあげていった。だが例の漁船群は動く様子がない。「大和」の警戒は未だ解かれずにいるのだつた。

本編 2012年10月9日 其一（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

本編 2012年10月9日 其二（前書き）

またまたお久しぶりです。

高校2年になってから全然更新する暇ができない。
すみません。

今回はちょっと短めになっています。

ではどうぞ。

本編 2012年10月9日 其二

Side「大和」CIC PM6:30

「対水上戦闘用意!!」

「2時の方向、水上目標ふたあーっ!」

「主砲戦用意、CIC指示の目標、撃ちい方始めえ!」

何度となくこの掛け声は繰り返され、CIC内の水上目標を映し出すレーダーディスプレイに映る光点は刻々とその数を減らしていた。

「停泊中の多数の敵艦から多数の高速飛翔物体を探知!! SSMです!! 数は88!!」

「多すぎだぞ!! ECMアクティブモードに移行! 照射始めえ!」

ECMに捉えられた中国海軍のSSMはアクティブモードに移行したECMから発せられる妨害電波によって数基が海に墜落した。だが「大和」や「赤城」はともかく「愛宕」や他の護衛艦はミサイル1発で撃沈されるような脆い艦である。ミサイルがどの艦を目標して飛行しているのか分からない以上、すべてを撃墜するしかない。

「補助対空レーダーでもSSMを確認!! 距離25000(m)!!」

「近すぎる!! ESSM発射!! 距離20000で主砲及び高角砲で三式弾発射!! 弾幕展開!!」

「撃てえ!!」

大和の第1甲板と第3甲板から爆炎が上がると、その中から15基のESSM(発展型シースパロー)が射出させられる。僚艦の「金剛」、「愛宕」、「風神」、「雷神」、「天王神」もVLSからESSM、SM2が発射させられた。総数88発の対空ミサイルは的確に目標SSMを狙うと、近接信管により確実に撃墜していく。

「目標、全基撃墜!!」

「「おおっ!!」」

命中率は完全な100%であつた。主砲操作を担当する砲術士もミサイルのみで全基撃墜できるとは思わなかつたらしく、発射命令に備えて指をトリガーに添えていたまま口をあぐりと開けている。「敵艦からの攻撃が停止しました」

「最優先で主砲の冷却をしる。その間はSSMの発射用意を厳重にせよ。艦載機格納庫へ通達。SAH-1による偵察、警告を行う。直ちに発艦準備を整えてくれ」

『SAH-1発艦用意、了解しました』

「総員、第一戦闘配備のまま待機。動きがあれば報告せよ」

Side「大和」後部甲板 PM19:00

大和艦内の艦載機格納庫には、F-3乙2型戦闘攻撃機が4機と、SH-60K哨戒ヘリが2機、そしてSAH-1戦闘哨戒機と呼ばれる偏向翼機が2機搭載されている。

SH-60Kは以前から自衛隊が装備する哨戒ヘリであるが、SAH-1は1年前に開発が終了したばかりの最新鋭機で、赤城政権による防衛力増強政策によりすぐさま増産、取得態勢に入つたものである。毎度のことながら予算は主に国会議員の給料と、たばこ税(税率244%)、89式小銃や96式装輪装甲車の海外への輸出利益によつて賄われている。

諸元を説明しておくところなる。

SAH-1 可偏向多目的戦闘哨戒機

全長 13.2m

全高 3.8m

胴体幅 2.3m

全幅 13.7m

乗員 2名

ローター直径 6.1m 2基

エンジン T700-IHI-701D(2200shp) 3基

最大速度	武装最大時	450 km/h
	非武装時	550 km/h
固定武装	M197	20mm3砲身ガトリング砲
追加武装	翼下ハードポイント	M134ガンポッド
		ASM-1、ASM-2対艦ミサイル

機体下部コンテナ内
 ハイドラ70ロケット弾ポッド
 RGM-84対艦ミサイル

97式短魚雷

AGM-114K対艦ミサイル

CBU-87 Mk82 (GCS -

1) 爆弾

(最大3.4t)

イメージし難い人は、ジパングの海鳥を想像してもらえばいい。
 その機体が今、飛行甲板へと引き出されているのである。

格納庫から飛行甲板へと通じるエレベーターが動き出し、機体がゆ
 っくりとせりあがってくる。

「まだ最終チェックがすんでいません!!」

「急いでやれ!! だがしっかりと見るよ!!」

「燃料給油装置早く引つ張ってこい!!」

「20mm弾足りないぞ!!」

「ミサイル、合図で持ち上げる。1,2,3!!」

「飛行甲板からCIC。発艦準備まであと1分かかります!」

「チェック終了、燃料もよし!」

「兵装補給完了。いつでも大丈夫です」

たくさんの作業員に囲まれて発艦作業を終えたSAH-1は、発艦
 準備に入る。

「Fortune inspector SeaWall。発艦作

業完了。システムオールグリーン。飛行甲板内への侵入許可を願います」

「Sea Wall、侵入を許可する。発艦は艦長の指示に従ってください」

「了解。飛行甲板へ侵入します」

ベア・トラップシステムに拘束されている機体は、そのまま甲板へと引き出された。この状態から発艦を行うのである。

「ベア・トラップシステム解除。Sea WallからCIC艦長。発艦許可を願います」

「・・・許可する」

「・・・了解しました。最終チェック、異常無し。Sea Wall、発艦します。」

そのとたん、甲板に、航空機の発艦を知らせるブザーが鳴り、甲板上にいた要員はすべて待機所に向かう。

「主翼展開。エンジン始動」

狭い艦内に搭載するため折りたたまれた翼が広がり、甲高い音を響かせてエンジンが回転し始める。この時、2基のローターは上を向いて垂直離陸の態勢を取っているが、一端離陸すると翼を水平に傾け、進行方向を向くようになる。さながらV-22オスプレイの小型版である。

キィ——ン

「テイク・オフ」

機体から伸びた主脚が甲板から離れ、機体が浮き上がる。ある程度そのまま上昇すると脚を内部に収納し、翼を水平にした。巨大な大和の飛行甲板から発艦したSAH-1は、一路中国海軍艦艇へと飛行をかいししたのだった。

主翼に対艦ミサイルを携えて。

Side首相官邸 PM7:00

「中国側からの返答は、19:00からの攻撃中止時に日本海軍全艦艇を中国領海内から退ける。ということです。いかがでしょうか」

首相官邸の非常呼集に応じた全閣僚の中で、外務大臣がそう切り出した。なぜ直接聞いたような言い方で無いのかだが、中国側が文書データでのやり取りでしか認めなかったからである。まるで某ネット掲示板のチャットのようなやり取りの末、中国が出てきた停戦条件がこれである。

「ぶっちゃけちゃえば自衛隊だからって残ることもできるんだけどね」

「農林水産大臣、そのようなすり替えはやめてください。まさかそのような言葉遊びを採用するとも？」

「・・・すみませんでした」

だが中国の領海に入っただけでないのは確かである。ここで折れてしまったら日本本土まで領有されかねない。そういう意味では、全閣僚戦う気満々である。防衛大臣など、成田空港に秘匿しているB-767 400型爆撃機の使用まで考えたほどだ。冷静な財務大臣でさえも、今回の中国に対しては攻撃も辞さないという覚悟を示している。

「とりあえず現場海域周辺の民間船舶は有事関連法の適用で離脱させます。後現場周辺で合流予定だった第2から第4艦隊を全速で現場へ向かわせ、防衛大臣には各艦隊に連絡をお願いします。B-767の使用はこちらから命令しますので勝手に使用を命令しないこと。あれは最高機密なのですから。また全国の中で、得に日本海沿岸地域の各基地、駐屯地には準戦闘態勢で待機と命令します。あ、後旧型艦による護衛艦隊の再編を急いでください。使うことになるかもしれません」

「了解しました。では私はこれで」

防衛大臣は席をはずすと、自衛隊全部隊への命令をつたえるため、市ヶ谷まで急ぐことになった。

「それと国土交通大臣には、全空港・港湾・道路の自衛隊優先を徹底して伝達してほしい。これは警察庁にも伝えてください」

「了解しました」

国土交通省大臣は席を立つことなく総理の言葉に耳を傾けている。おそらく次の言葉を聞きたいのだろう。

「それでは皆さん」

閣僚がかたずをのんで見守る中、ついに首相の口から出た言葉は代々の総理が一度も口にしたことのないものだった。

「現在時刻より、有事宣言を発令します」

その数分後、この総理の宣言は全国のテレビ局で速報として流され、列島を揺るがした。その後時間が経つにつれ、全てのテレビ局が特別報道に切り替え、内閣の緊急会見を繰り返し報じた。

ただし、某テレビ東京のみは相も変わらずアニメ番組を流していた。ちなみにその日の視聴率は0%だったそうだ。

『本日午後4時ごろから発生した海上自衛隊機と中国軍機との衝突を火種とし、その後艦隊戦にまで発展した一連の騒動ですが、本日午後7時過ぎに発表された首相による有事宣言により、日本が戦後初めて組織としての戦闘に突入することが決定しました。以前から防衛力の改革を行ってきた赤城内閣ですが、本当に日本を防衛することができるのか、疑問の声も上がっています。また現在中国からの弾道ミサイル攻撃に備え、自衛隊のパトリオット部隊が都市や原発といった施設へ展開し、さらには海上に全14隻にも及ぶイージスシステム搭載艦が展開しています。このイージス艦は、新造したものを含め、すべてにBMD能力が付与されており、新たな弾道ミサイル迎撃能力も備えていると発表されています。未曾有の戦闘態勢に入った日本に明日は来るのでしょうか。以上で官邸前からの中継を終わります』

その日は、緊張に蝕まれながら0時を迎え、大半の国民がテレビを

見守っていたが、不思議とパニックになるところは少なく、いつもは自衛隊反対などと叫んでいる迷惑野郎どもも、この日だけは静かになったのである。

こうして有事宣言が起きてから12時間が経った朝7時、ことは急展開を見せた。

本編 2012年10月9日 其二(後書き)

草薙「おおつ、出てきたね、SAH-1。」

如月「つてかあれ絶対海鳥のパクリだろ」

作者「すまん。ほんとカッコ良かったから出したくなっただ」

如月「ちゃんとタグつけとけよ」

狩野「そういえば、イージシステムで気づいたんだけど、赤城型護衛艦もイージシステムがついてたわよね？　なんでSM3が搭載されてないの？」

作者「それは・・・」

赤城「ただBMD能力が付与されて無いのと、VLSの数が少ないから通常の対空ミサイルだけが精いっぱいなのよ」

作者「うわっ、なんか出てきたと思ったら赤城の艦魂が」

草薙「そういえば前回艦魂出てたけど、登場があやふやなんじゃ無いか？」

作者「うん。急に思いついたことだからなんも展開考えて無いんだよね」

狩野「ちゃんと考えといてよ。この子を悲しい目に合わせたら許さないんだから」

草薙「あれ？　じゃあ狩野さんは艦魂がみえるのか？」

狩野「まあね」

作者「さて、長くなつてしまいましたが、ここらで締めます。次回をお楽しみに！」

狩野・草薙・如月・赤城「・・・またね」

本編 2012年10月10日（前書き）

こんにちは。

データが吹っ飛んだときは泣きそうになり、なんとか書いてみたこれも当初よりかなり劣化してしまいました。

更新が遅くなったことも併せてですが、文句は学校に言ってください。定期テストや模試を1週間置きに入れるガッコが悪いのです。

ごめんなさい。

では毎度ながらの駄作ですがどうぞ。

本編 2012年10月10日

防衛省地下8階 NCCS中央管制室

有事宣言を発表した赤城総理は会見を終えたその足で防衛省へ向かい、このNCCSで防衛大臣とともに戦闘の指揮に当たっていた。そして朝7時になるうというとき、驚くべき情報が入ってきた。

「偵察衛星、『長門』が中国大連港から出港する空母機動艦隊を確認しました!!」

『長門』とは2011年末に打ち上げられた7基の偵察衛星の内の一つである。偵察の他に何か別の機能もあるという噂があるが、ほとんど情報が公開されていないため真相は明らかでない。

「機動艦隊!? 強襲揚陸艦の間違いじゃないのか?」

防衛大臣はその可能性があるのではないかと指摘するが、衛星監視の隊員は譲らない。

「いえ、我々が前々から危惧していた旧ソ連からの売却艦である『フリヤーク』だと考えられます」

『フリヤーク』とはスキージャンプ台を備えた旧ソ連の軽空母であり、中国軍のダミー会社にカジノ経営と称して買い取られて以来、大連港のドックで練習空母としての改造を受けていた艦である。『赤城』型には遠く及ばない性能だが、相手が航空戦力を出すというだけで艦隊の意味が変わってくる。

「艦隊陣容は?」

「巡洋艦3、駆逐艦7、フリゲート7、空母1、強襲揚陸艦5です。空母と揚陸艦を中心にして南東へ進んでいます。潜水艦もいる可能性がありますが、それは今のところ不明です」

「南東か・・・。尖閣諸島が怪しいな」

「はい。衛星からの映像ではJ-15、もしくはSu-33と一致する機体が発艦していました。これなら我が国領の爆撃も可能です。航空自衛隊による迎撃も不可能ではないでしょうが、ある程度の犠

性を覚悟しなければなりません」

「そうか。各艦には悪いが日本海に急行中の第2艦隊と補給作業中の第1輸送艦隊を敵艦隊追尾に回してくれ。海兵特殊強襲艦隊は敵艦隊の最終目的地が判明し次第現地に急行してもらう。犠牲は覚悟の上、現場の人も同じ気持ちだと願う。だが、だからこそ、この『戦争』で犠牲者を出すわけにはいかない！！絶対に犠牲者ゼロでこの戦いを切り抜ける！！」

「・・・分かりました。では新田原基地からRF-2Fを出します」
「それでいい。念のため周辺基地のF-2には全機戦闘待機を告げておいてくれ」

「了解です」

「では首相、隣の部屋へ移ってください。アメリカ軍、陸海空幕僚長との会議があります」

「分かった」

首相を連れて隣の会議室へと移った防衛大臣は入室してからコの字型に並ぶ机の中心に腰を置いた。

いまや日本国内の米軍は通信施設とそれを守る警備隊位しか存在しないため、陸海空幕僚長以外は皆テレビ回線での会議である。首相はアメリカ軍には極力期待しないよう注意しながら会議を開始した。

2012年10月10日 AM8:40 九州沖

九州沖上空を空気と波を切り裂きながら飛翔しているのは航空自衛隊新田原基地偵察航空隊の一RF-2F バイパーゼロ 偵察戦闘機である。一RF-4EJ フアントム の退役に伴い、一RF-15J イーグル とともに開発がすすめられたRF-2Bの改良発展型である。具体的にはF-4EJの退役に伴い緊急生産されたのがF-2C/D、その機体の対艦性能をそのままに対空性能を強化したのがF-2E/Fという具合である。

要するにこの機体のアドバンテージである「対艦誘導弾を4発積載した状態で戦闘が可能」をそのままに偵察機へ改造したのである。

この時飛んでいたR F - 2 Fも新型対艦誘導弾のA S M - 3、対空誘導弾A I M - 9 Lサイドワインダーを4発ずつ携行していた。もちろん機関砲も健在である。

『こちらエアニードル。レーダー上に敵艦隊を確認。潜水艦の存在は認められない』

『N C C Sよりエアニードル。艦種識別のため偵察映像がほしい。視認距離まで近付けるか？』

『やってみます』

R F - 2 Fは速度を上げると艦隊へ近付いていった。

搭載レーダーがなんとF - 3と同じなのでレーダーで確認できても視認距離まで近づくにはかなり時間がかかるのだ。

『視認距離まで到達。カメラに写します』

そこに映る23隻の軍艦は壮々たるものだった。

『まるで連合艦隊だ……。あ、いや識別完了した。危険空域から離脱せよ』

N C C Sにあるスーパーコンピューターを使えば、映像を使った艦種識別など数秒とからない。

『了か……。なに！？ 敵ミサイルレーダー波照射を受けた！！』

通信を一方的に終わらせたパイロットはチャフをばら撒き、ミサイルのレーダー波を欺瞞させる。幸い欺瞞によって自爆したが、その間に空母からJ - 15が発艦してしまった。S u - 33のコピーであるJ - 15は中国製とはいいながらF - 15に匹敵する能力を持つといわれている。第5世代戦闘機を相手にできるF - 2 A / Bの対空戦闘能力を更に強化したF - 2 Fなら、相手に不足はないのだが何せ今はA S M - 3を4発も背負っているのだ。機体が重いと機動力を損なって対空戦闘に不安が残る。

そうすると投棄が使用のどちらかしかない。独断だがこの際仕方がない。

兵装をA S M - 3に設定し、H M Dの中心に映る一十字 レティクルに中心の巨艦、つまり空母を捉え、ロックする。機内にロック

アラートが鳴ると同時に搭載する全対艦誘導弾を撃ち放し反転急上昇、チャフ・フレアをばら撒きながら対空ミサイルをギリギリでかわす。同時に対空ミサイルを撃ったJ-15をロックするとAIM-9Lを発射し、粉碎する。更に向かつて来るJ-15をすれ違いざまに機関砲で掃射。毎分6000発を誇るRF-2Fの機関砲は一瞬で敵機を穴だらけにし、撃墜する。

自身が放った4発のASM-3は超音速で『ワリヤーグ』へ突貫し、敵艦に搭載される30?フランクスの対応速度を超えて全弾がそれぞれ機関部、航空機格納庫、艦橋、飛行甲板に着弾・爆発した。機関が完全に沈黙したせいか速度を著しく落として黒煙を吐きだし、艦隊から落伍し始めた。更にゆっくりではあるが、艦尾が沈みこみ沈没しかけている。少し強めに設定した信管のおかげで、艦体に突き刺さってから爆発し、艦内に吹き荒れた爆風は外部から見える以上の被害として艦底をぶち抜いていたのだ。

RF-2Fのパイロットもそれを眺めているわけにはいかなかった。ほかの巡洋艦や駆逐艦から放たれた対空ミサイルが機体をロックしていたからだ。

その数、44

実際それほどの数になるとお互いの対空ミサイルのレーダー波が干渉しあって目標に達する前に自爆してしまうことがあるが、今回だけはそんな事にならなかった。

再びチャフをばら捲き急旋回、上昇で逃げを試みる。しかしそのうちにフレアは底をつきRF-2Fに残された回避手段はその機体の機動力だけとなってしまった。

まだ追ってくるミサイルは10発以上ある。パイロットは一か罰かの賭けに出ることにした。残っていたAIM-9Lを投棄し、機体を軽くすると上方80度で急上昇し、各ミサイルの位置がいつにまとまる時を見計らって一気に棒高跳びの背面跳びのように、機体を

そらせて急降下した。まとまっていたミサイルはR F - 2 Fに付いていこうとして他のミサイルにぶつかり爆発し、それに巻き込まれたミサイルも次々に誘爆した。これで一度に12発の無力化に成功したのだが、残っているミサイルもまだ5発あり、再び上昇できる余裕はもうない。そこで一気に海面まで降りると、そこで更に急上昇。ついていけなかったミサイルは、すべて海面に激突すると、巨大な水しぶきをあげて果てた。

気がつくともう敵艦隊の射程から逃れていた。

『エアニードル！！ 応答しろ！！ 古賀1尉応答するんだ！！』
集中と緊張により途切れていた聴覚が戻り、何度も呼びかけたであろうN C C Sのオペレーターの声が聞こえてきた。

『こ、こちらエアニードル。敵の攻撃を受け、機体を軽くするため対艦誘導弾を使用しました。着弾した空母は沈黙。確認した時点では艦尾が沈み始めていました。その後2機のJ - 15との交戦後、一度に44発の対空ミサイルに追われ、回避しました』

『良かった。無事だったか。衛星からの映像で空母が艦隊から落伍したことが確認された。救命活動はされていない』

『はい。勝手な行動で戦闘を始めた責任は私にあります。処罰は甘んじて受け入れます』

会話があまり噛み合っていないのでオペレーターは重傷と見たのだろう。そのことに關して追求するのをやめた。

『あ、いや。空母を潰したことは我々としてもうれしい。何せ残りの艦隊構成艦にF - 2で効果的な攻撃ができるからな。あとは後続のF - 2に任せて帰投してくれ。ありがとう』

艦隊の攻撃計画は本当であった。今頃防衛大臣が発した出撃命令により、航空自衛隊各基地のF - 2 A / B / C / D / E / F、R F - 2 D / Fがかわりなく全てが離陸しているところだろう。海上自衛隊航空基地でも旧型になりつつあるP - 3 C対潜哨戒機と最新のP - 1対潜哨戒機がA S M - 3と爆雷を搭載して離陸をはじめていた。更に佐世保を出港して日本海に向かったが艦隊追尾に戻ってきた第

2 艦隊も援護に回っている。既に旗艦『武蔵』の主砲射程に全ての艦が収まっていた。

そして航空自衛隊のF-2、海上自衛隊のF-3、P-3C、P-1、第2艦隊が中国艦隊を取り囲んだ午前11時30分、北緯30度43分 東経128度04分で行われたのちに『大和直上海海戦』と呼ばれる戦闘が幕を開けた。

本編 2012年10月10日（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4563q/>

平成日中戦争 ～日本のみらい～

2011年11月10日20時10分発行